

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 塩瀬博子

論 文 題 目

越前若狭における渡来系伝承の研究

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	櫻井龍彦
委員	名古屋大学	教授	内田綾子
委員	名古屋大学	准教授	西村秀人

論文審査の結果の要旨

1, 本論文の構成と概要

日本の歴史と文化の形成に渡来人の役割は大きい。古くは縄文時代の終わり頃からアジア大陸から継続的に渡来の波が押し寄せてきた。こうした外来の異人と異文化を列島の人びとはどのように受容または排除してきたか、本論文はその多様なあり方を歴史学や考古学などの史実に従属する立場からではなく、伝説をはじめとする口承文芸、祭礼・年中行事などの無形民俗文化財といった広い「伝承」ジャンルを通して通時的・共時的に考察したものである。渡来文化の痕跡は日本列島の各地に見られるが、研究対象とした地域は、大陸に直面し、畿内政権からも比較的周縁的な位置にあった日本海沿岸地域の越前・若狭に焦点を当てた。この地域は山陰や北陸に比べて海から人や物が漂着しやすい独特な地形をもち、外来者との交流・交渉の歴史文化が豊かに残っているからである。

各章でとりあげた伝承は主として8世紀以降のものであるが、そのなかには現在も存続するものもあれば、廃絶したものもある。その存続と廃絶の要因を現地で直接、伝承者たちから聞き取り調査をして考察する手法は一貫している。総じて本論文は日本海の海の道を介した人の移動と異文化接触を考察したものである。

本論文は序章、終章をふくめて全体で7章から構成されている。

序章では、研究の背景、目的と意義、研究方法、先行研究の紹介と問題点、調査日程・調査地の概要などを述べ、論文全体の構成を説明する。

渡来という移動現象が人の移住、定住によって、そこに由来する文化も受容される。それを越前・若狭に伝わる伝説や儀礼・行事などの伝承文化を対象とし、伝承の変化、心態、主体などをめぐって考察することで人と伝承との関係を明らかにすることが本論文の目的であると述べる。

第1章では、調査地を日本海沿岸地域に限定し、越前・若狭と敦賀に焦点を当てたことの意義を述べている。

日本海地域の北陸と山陰の風土的、歴史的違いを述べ、さらに北陸のなかで越前と若狭を比較し、隣接しているとはいえ地理的自然環境も異なり、文化交流史からも違いがあるという。

第2章では、本論文の研究視点であり方法論でもある口承文芸をふくめた伝承学について、柳田国男以来の研究史と成果をふまえた上で、本論文の理論的な位置づけをおこなっている。

すなわち現在に生きている過去の伝承を地域の民俗社会のなかでとらえ、伝承者の心態や精神性に焦点をあて、伝承の存在意義を問いなおそうとする。

第3章では、越前の伝承をとりあげる。福井県蒲生市に伝承される漂着者伝説に由来する冬の年中行事「アッポッシャ」、越前市白山地区千合谷の貴種流離譚に属する百済姫伝承と湧水伝説の特徴と現在の伝承の姿を論ずる。

「アッポッシャ」はナマハゲとよく似た異人來訪の行事であるが、訪問者役の扮装や行動には遭難した漂着民を想起させる要素がめだち、ナマハゲのように異人を神や祖霊に結びつけていないというのが大きな特徴である。しかしながらこの行事も担い手の不足、子どもの減少、教育観や家庭環境の変化などで伝承の意義が薄れていて存続は厳しい状況となっているという。湧水伝説では百済から漂着したお姫様が奇跡をおこして村人から敬愛された伝承であり、高文化や技術が外からもたらされるという背景があるという。

論文審査の結果の要旨

第4章では、旧敦賀郡の伝承をとりあげる。敦賀市五幡の蒙古来攻伝説と旧敦賀郡に点在する新羅系神社と地名について論ずる。新羅系神社は全国に分布するが、この地の神社の位置づけと由来について説明している。

ここでは伝承推移の一つのありかたとして生成→成長発展→衰退→再生再興の過程があり、蒙古伝説をこの事例として説明している。衰退後の再生再興で興味深いのは、それが集団ではなくある個人の力によってなされ、そこから世人に広く認知されていく事例となっている点であろう。敦賀湾周辺には新羅系の神社や地名が多く残っていて、人びとの記憶にもそれは継承され、祭礼神事の担い手は渡来系由来の認識をもって伝承している。こうした現象は当地と朝鮮半島からの渡来者とが歴史的に深い関わりをもってきたことを物語るといえる。

第5章では、若狭の伝承についてとりあげる。小浜市矢代の「手杵祭」と若狭の「王塚」伝説である。いずれも貴種流離譚に属する伝承である。

手杵祭は1200年続く伝統祭礼であるが、唐船で来着した異邦人を殺害した内容ももつため「殺人祭」とマスコミで喧伝され、そのため地元の人びとが伝承の意欲をなくし、ほぼ廃れてしまった現状を分析している。伝承が衰退する要因として一般的に少子高齢化や過疎化の現実があげられるが、この祭りは情報社会の負の側面と世間の人びとの負の好奇心が伝承者に精神的な葛藤をもたらした事例として説明される。「王塚」ももともと由来にもとづく祭礼がありながら消滅した伝承だが、その原因は住民の移住によるものであった。伝承がいかにか「場」と結びついていて、その物語を記憶する伝承者が不在であると、伝承の意義がなくなり、存続が困難であることを示している。

終章は伝承学の視点からのまとめとなっている。

各章で述べた越前若狭の各地域の伝承の特徴をまとめ、そこから越前若狭における渡来系伝承の全体的特徴を指摘する。さらに伝承を地域の人びとの集合的記憶として捉え、伝承主体者の〈受容・揺れ・拒否〉として現れる心態を論ずる。渡来現象の多種多様性、伝承者の外来者・外来文化に対する記憶と行為の多様で異質なあり方をふまえて、人が他者に対していかなる関係性を結び、いかなる心性を示すかという普遍的課題に説き及んでいる。

2. 本論文の評価および問題点

本論文の獨創性は、伝承という民俗学的アプローチによる詳細な地域研究であること、異文化接触による受容によって形成された文化の伝承者の精神や感覚を読み解こうとした心性史であること、さまざまな「伝承の現在」を考察した事例から、文化の伝承にとって必要な環境や条件とはなにか、という現代的課題にもつなげていること、研究手法としては文献による過去の文字記録と現在なお語られながら生きている記憶や行為とを結合させ、特に現地での聞き取り調査、参与観察によって、伝承心理の奥行きまで見ようとしている点などがあげられる。

その結果、中央史観からは見えてこない地方の多様な生活文化・精神文化の存在や民間の人びとの日常的な歴史文化が浮かび上がり、地域の人びとの現在の視点から見直すことで、集合的記憶から醸成される伝承主体者の心態パターンや社会的状況、時代による価値観の変遷などによって伝承のあり方がどのように変容していくかを明らかにしている。伝承学という学問分野のすそ野をさらに拡大した成果と言ってよいだろう。

論文審査の結果の要旨

一方議論が十分に展開できなかった側面もある。

筆者は越前と若狭に伝わる伝承を対象とし、さらに越前から旧敦賀湾を別個にし、3地域で考察している。これらの地域は隣接しているとはいえ地理的環境も異なり、文化交流史からも違いがあるという。そして伝承の特徴を越前では訪問者行事や湧水伝説、敦賀では蒙古来攻伝説や新羅系神社と地名、若狭では手杵祭や王塚など貴種流離譚を主として取り上げ論じている。しかしこうした伝承分布の違いが、地域の地理風土的環境や対内外文化交渉の歴史的な違いから説得力ある説明ができていくかという点、決して十分とは言えない。地域の伝承を通して、地域の人びとの特徴ある心性を探ることはできるだろうが、伝承をその地でなければ形成されなかった必然性を、特に地勢や自然環境から説明するのはなかなか難しいことである。とほいうもののこれは説明の視点の問題で、本論文の論旨全体に及ぶ問題ではない。

3. 評価結果の判定

上記3名の委員からなる審査委員会は、平成29年2月14日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。